

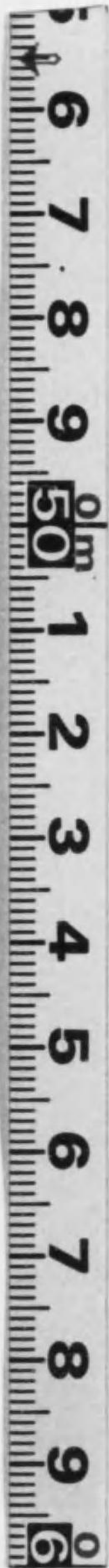
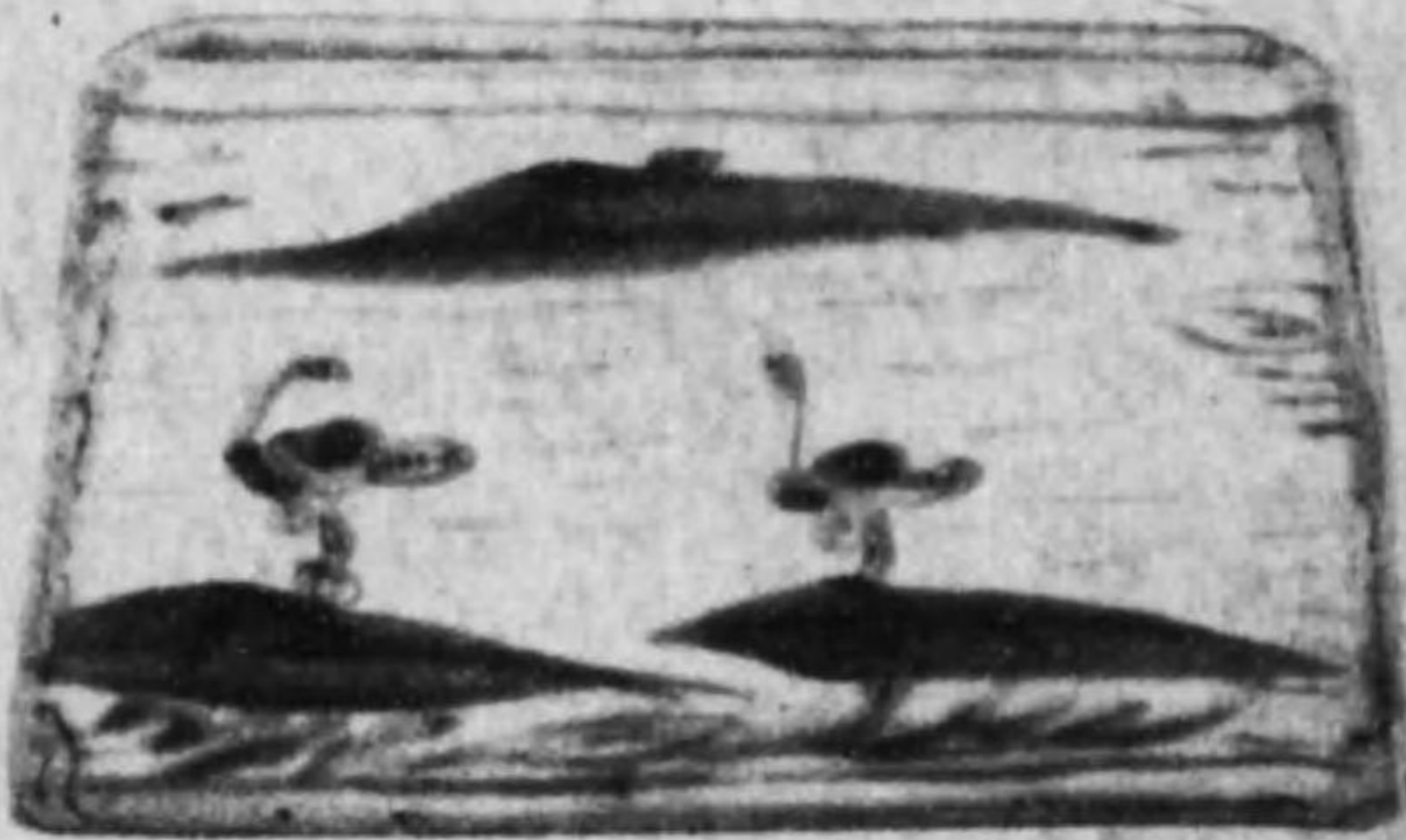
911.56

911.56-Ku51-3ウ



1200500756714

×
複写



始



011.56
ku51
3

新詩
叢書

9

詩集

天日の子ら

藏原伸二郎著

湯川弘文社刊



965
2

御神木

— 序に代へて

1

畏友保田與重郎君が先日土佐國にある樹齡三千年に達するといふ杉を拜んで來た話をして呉れたので大變感興をおぼえ私も一度は是非拜したいと考へてゐる。三千年の樹齡といふのは、その道の權威三好學博士の鑒定だから間違ひは無いことと思ふが、勿論天然記念物に指定されてゐて、私も嘗つて寫眞で見たことがある。しかし、かうした神木の美しさといふか、貴さといふか、一つの超自然的な靈威感、寫眞などを見ては感じられるものではない。それは、わが國體の尊さや有難さが、なかなか以つて夷狄などに解らないのと同じである。科學的

な知識や理論で到達し得るものなら事は簡単であるが、わが民族の魂の奥には、さういふものだけで解決し得られない深奥なるものが今も尙生きてゐるのである。それは何とでも名前は附けられるものであるが、どんな名前を付けても違ふものであらう。一體に名前がなければ尊重しないといふ癖は元來、歐米的な物の見方である。古事記などを讀んでも、私は三千年の杉の木を拜する氣持で、私は全部を信用することが出来る。考古學なども最初は、わが國體に關する精神的な面を置き忘れた唯物觀にのみ支配されて研究されてゐたが、最近では、それ

ばかりでは解決出来ないで、漸く精神的な研究もあはせ考へられる傾向になつて來たやうである。日本考古學も、その研究が深まれば深まる程、古事記の記事と一致して來るべき性質のもので、これが逆に次第に背馳して行くといふのは、その根本に於いて研究の方法が間違つてゐると云ひ得る。

古典の研究發表にしても、私如きすら不滿なものが多いのである。例へば、

さねさしさがむの小野に燃ゆる火の火中に立ちて
問ひし君はも

の弟橘姫命の御歌にしても、土俗學的な研究から、これを只單なる地方の民謡なり、と論考するが如きがそれである。これなども、古事記の精神的な權威を強ひて無視した論考であると思ふ。何故にあの御歌が、弟橘姫命の御歌として古事記のあの個所に載つてゐるかといふ所に大きな意義があるのであつて、そもそも民謡であるか、御歌であるかなどの問題は、末の末の事である。

「撃ちてしやまむ」の神武天皇の御製にしても、われわれは、烈々の御精神をあくまで、奉戴すればいいのであつて、御眞作か、どうかなど、つまらぬ事を考へる必要はない

のである。古事記を信用するか否かは、その人の國體觀によつて決せらるべき問題であつて、御製として載つてゐるものが御製と信じ得ないものがあるとするれば、その人は不幸な日本人である。古典歴史の研究に唯物史觀が、あたかも唯一の權威であるかのやうな研究の方法が通用してゐるのは残念なことで、日本の歴史を世界史の中の同一平面上の一部分として見る所に、重大な誤りがある。

先に曰つた杉が、只三千年の杉といふだけの單なる自然科學的な見方乃至、只單に植物學的珍樹としてだけ貴

重するだけなら、アメリカ人も尙且つこれをなし得るのであつて、神木としての靈感を感應し、その感應によつて、一種の精神的、みそぎを體驗することが出来るのは、日本人の特質であらう。何とも説明しがたい神寂びに打たれるのである。

保田君は、あの神木を拜んで、飛鳥、奈良の佛像さへ、影が薄くなるやうな氣がしたと述懐してゐたが、さもあるべしと、私も深く感動した事であつた。

この境地で、樹に感應し、石に慟哭し得るものはわれら民族の習ひである。

このことを幼稚だとか野蠻だとかいふ言葉で一笑するものがあれば、それこそ自らの存在を否定する者である。君が代の中のさざれ石が岩となることは、近代科學の否定するところであるが、石が太ると信じ得るわれらの感覺なり靈性なりは、まことに美しく幽幻なものである。

今日、民間で石や樹木を盆養し、それを精神的な高さに於いて、愛好し、觀賞し得る民族は、これ亦わが民族の特質によるのである。われらの趣味や生活の最高の境地が寂びにあることは由來、石が太るといふことを感得し得

るわれらが特性に原因することであつて、寂びも又神寂びの境地でなければならぬ。

物を通して神々の世界を感應し、それによつて、みそぎを行ひ、生活を清く明るくすがすがしくするわが民族傳世の願ひが、生活の末梢にまで表はれてゐると言つていいと思ふ。

神祭の精神が、ここにも生きてゐるのである。

則ち盆樹の古木に神と稱するものがある。これは只の枯枝でしかないのであるが、古木の神性を表現するのに大切なものとされてゐる。

特に、枯枝の部分を大切にして、觀賞の重大要素とするが如きは、全く神寂びの境地にあこがれない民族には出来ない觀賞法だと言つていい。只石一つ床の間に置いて眺めたり、水盤に置いたりして歡ぶ心情は、わが國體と一脈のつながり無くしては不可能な事であると考へる次第である。本當は石を愛玩するのではなく石を祭る氣持である。

詩集 天日子ら 目次

御神木

―序に代へて

天目の子ら	3
緋くひな	6
詩人高村光太郎	14
南京特急「天馬」	18
光榮の時は来た	20
未だ花開かず	24
蘭と蕙	26
旗	28

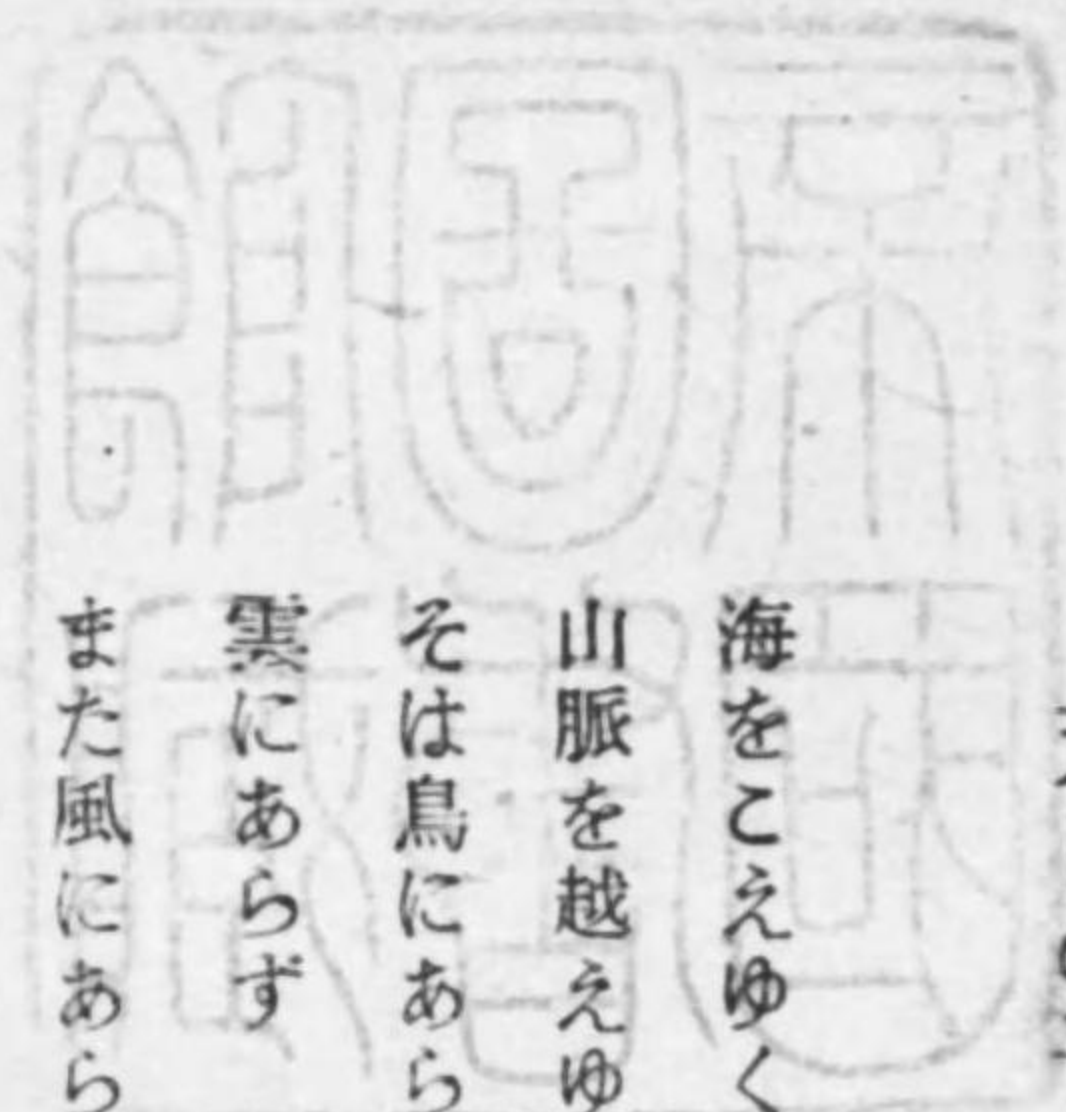
奉祝の日に	31
天來臣民	34
山草賦	37
神國	40
天南星の歌	42
深山風蘭の歌	45
みやませきこくの歌	48
無題	51
土蜘蛛を撃つ	55
われらの血は燃ゆ	57

神いでましぬ	60
峠の畠	64
神の宇創り奉らむ	67
ああ特別攻撃隊	71
日本の若鷲	75
職場の戦争	78
共に生きる	81
國幸を守る	84
國の穂	87
聖恩を歌ひ奉る	91

大和をとめ	94
勅かしこみ征かむ	97
神州を護るもの	100
少年正氣の歌	102
靈峰高千穂	106
大和少女	109

天日の子ら

天日の子ら



海をこえゆくもの

山脈を越えゆくもの

そは鳥にあらず

雲にあらず

また風にあらず

人馬なり

砲車なり

われらが旗なり

天の日なり

天の窟戸を出で給ひし

われらが神なり

あまねく

天地をてらしたまふ

われらが大明かみなり

ああ 天日の子らをして

いま 遠くもゆきて

あじあの四隅を守らせたまふ

いまとはそもいかなるときぞ

天に弓をひき

天を指し罵るもの

天日を暗くするもの

かの人面獸心の百鬼らを打ち滅し

本然の高貴なるあじあを護らんが爲なり

われらが、美しき天日の下

聖なるあじあの峡谷に

蘭蕙の匂はざること何ぞ久しき

緋くひな

くひなの子供は
卵から出るとすぐ走り出すし
目は青くて身體は眞つ黒だ
二ヶ月目には目の色が紅くなつて
三ヶ月目には紅玉のやうに光つてくる
黒い足も紅くなり
胸は煉色に背中は褐色に変化する

どうしてこんなに身體の色が變るのか
それはかれらが神様からさづかつた
有難い保護色でせう
八月の強い光線の中で
赤土の丘に繁つた雑草にもぐり込むと
かれらの姿は全く見つけにくい

とても臆病なくせに残忍なところがあつて
初めて見るものは何でもおそろしいのか
白い雲が青空に浮んでゐても隠れようとす

飛行機など一番こわがる

そのくせ蟬やかまきりみみずなど丸呑みし

兄妹同志毛をむしつて喰ひ合つたりする

動物のすることだからしかたがない

日が暮れかかると急に元氣よくなつて

若駒のやうな勇ましい歌を歌ひはじめ

おしまひにとんとん戸をたたく聲になる

人が近づくとその聲が遠く去つてゆき

人が離れるとまた聲音が大きくなる

その實くひなは少しも動いてゐないのです

聲だけで自分の位置をごまかす
なかなかずるい鳥です

太陽が地平にかくれ

夕月がほのかに浮ぶころ

遠方から波のやうにおしよせてくる

都會の騒音と

天いつばいにひろがる蛙たちの鳴聲は

くひなどもを本當に愉快にするらしい

ごらんなさい

美しい沼澤地方に

夜露が月かげにきらきら光つて

あちこちの葦やよしのかげから

子供くひな共の一群が

さかんによび合ひ

さかんにいななき合ひ

びんせふに走り廻り

愉快なかけつくらをしてゐます

お母さんくひなは

今大事な巢にこもり

美しい卵を産んだばかりです

お父さんくひなは

とてもよろこんで

一段と高い聲をはりあげて歌つてゐます

くるる、くるる、くるる……

あつちのくさむらにも

こつちの葦の中にも

うす青い卵がころがつてゐて

その周りをたくさんくひなたちが

丸くとりまいて隣組全體で

勇ましい歌を合唱してゐます

月の出た八月の夜は

かれらに一番たのしい季節です

やがてすすしい秋がきて

霜がふるところになると

もうくひなたちはゐなくなりませう

今年生れた子供たちをいたはりながら

みんな仲よく連れだつて

あたたかい南の方へ去つてゆきます

來年の春がきて青草が繁つてくると

又もとのところへもどつてきて

卵を産み子供たちをそだてて

仲よくあの勇ましい歌を歌ふのです

この緋くひなは日本だけにしかゐない

美しく勇ましい鳥です

みなさん

僕らをよるこぼしてくれる鳥たちを

大事にしてやりませう

詩人 高村光太郎

人の顔の中から

宇宙を掴み出さうとしてゐる

詩人高村光太郎

そこには何万年もながい

生物の歴史が刻まれてゐる

谿谷や山や海や氷河の跡など

生物に對する

月や星や時間や風の

目に見えない影響など

あの人は歴史地理學の大家で

自分の腕と魂に長年砥石をかけ

日本刀のやうに磨きあげ

そこに天體の裏表が映るやうに

人間の深い匂ひや沸まで砥ぎ出しても

白や青や紫の光が現れても

まだ氣に入らないで

幾夜もねむらないで惱んでゐられる

まことに

世にも稀なる靈魂の磨き手だ
ま晝間でも深い井戸の底には
星や月がはつきり映つてゐる
そのやうにあの人の深い眼には
宇宙の祕密な歴史が輝いてゐる
あまりに人間的で
だからあまりに非人間的な
苦悶や愛の表情をもつて
大地と天界の堺を行く

あの人は巨大な龍のやうだ

南京特急「天馬」

七月十六日午前十時

南京特急「天馬」にのる

上海 崑山 蘇州 無錫

常州 圓陽 鎮江 南京

驛員はすべて日本人

呼子の支那人も亦日本語

沿線半里おきに兵隊さんが立つてゐる

灼けつく炎天にじつと立つてゐる

非常にすまない有難い氣がする

蘇州から支那の少女が三人乗つてきた

少し古風な服装だがみんな綺麗だ

足と手の線がとても美しい

つんとすましてゐる

天馬が鎮江を出ると忽ち

ものすごい暴風雨がやつてきた

三人の少女達がより添つて手をつなぎ合つた

大雨の南京停車場は夜のやうに眞つくらであつた

光榮の時は來た

木炭も蠟燭も粟もなくなつた時
われら日本人は
みんないちやうにぼろをきて
すつばい草や苦い木の根を噛んだ
星や月が太陽と共に身近にやつてきた
太古われらの祖先がしたやうに
洞穴がわれらを暖ためる

森林がわれらに安息をあたへる
風が野生動物たちをつれてきた
祖先がながい間したやうに
われらもそれに耐へるだらう
裸になつて初めて祖先の血が蘇へり
それがわれらの精神を護り
われらのくにわれらの子孫を守る
われらの忠義をまもる
いまやわれら一切を差上げる時がきた
その光榮の時がやつて來た

おそくもなく早くもなく
その來たるべき時にやつて來たのだ
今こそわれら
大君の邊にこそ死なむ
天と地の間に轟々と鳴り響く
あの勇しい雄叫びがきこえるか
壯麗なる一大祭典が始つてゐるのだ
大和の民族の運命を決する
戦ひが始つたのだ
人々よ 何ぞおくるべき

ああ つひに 光榮の時は來た

未だ花開かず

深山と高山は
のぼるにしたがひ
植物の生態を異にす
陰濕の陽かけを好むもの
日南の岩石をこのむもの
極度の乾燥に耐ゆるもの
しかも彼等の欲する風物の中においてのみ

かれらは好適最美の花を咲かしむ
われら民族また
上に聖天子をいただき
下好適の大地に立ち
悠久二千六百年の間
われらの米をつくりわれらの麥を喰ふ
かくてなほ
われら独自の豊麗壯美の花開かずとすれば
ああ その罪いづこにありや

蘭と蕙

わが詩みな蘭と蕙となれり
春蘭秋蕙葉いよいよ青し
わが妻わが子
その芳香に酔ひ
その華を喰むといへども
日に日に衰へゆけり
ああ 妻よ 子よ

蘭よ 蕙よ

わが詩よ

汝いづこを指して征かんとするか

ただ

國のゆくところに従つてゆかんのみ

天下清明なり

旗

邊境の岩角にありて

新しき風を豫感し

新しき季節を遠望し

祖國の運命を據ふもの

民族の意志を代表するもの

旗

敵に向つて峻嚴なる位置を決定するもの

故郷に向つて愛の通信を發送するもの
旗

絶域の城頭高く

四面敵意の中心にありて

平然と雲にはためき

大陸の風に歌ひ

太陽にきらめくもの

旗

一切の個人的なるものを忘却し

ひたすら勅命をかしこみ奉るもの

旗 尊嚴なる旗

ああ われらが旗

今や東洋の四邊をゆく

歩武堂々

神のごとき軍隊の

鉞のごとき精神の

先頭にひるがへるもの

旗 大和民族の旗

奉祝の日に

落葉の弾力にはちかれ

雑木林から洩れくる秋陽をちらつかせ

野兎が走る

蘇芳の實がひかり龍膽の花の色におどろく

透明な自然 松葉は高い空に牙え

はるかな雲に反射し

鉾杉の群立がするどく碧天にささる

箱根秩父甲武の山々は
茜いろの西方に斷續し高低する
この爽味な大氣の中を
たれ一人歩いてをらぬ
落葉のむれる匂ひ山懷の暖かさに呆け
北の斜面で冬葵春蘭をとり
南の斜面で山百合の球根を掘り
りんだうの赤い根をさがした
ここは向丘の臺地
頂上の松林で松露をとる老人に會つた

藥草の話をしながら山を降つてゆくと
中腹で日が暮れ村の老人と別れた
三日月ののぼる部落があつた
秋風の路に晴衣を着た少女たちが
いつばい群がり月光と遊んでゐた

天來臣民

わたしは

あのおそるべき

大阿蘇の山奥から出て来た

火山は私の少年に火を燃やし

祖先は純粹日本人の血を遺傳した

わたしは

悠久二千六百年をつづいてゐる



阿蘇家の同族 天來臣民の末孫

わたしの血はつねに勤皇にもえ

わたしの志はつねに君國にある

わたしは

この血統をみづからほこり

情熱を火山の焔にたき

か的一切の敵と闘はんとする

いま民族の大いに興るとき

そのとき

わたしは才のあまりに乏しく

わが意志のあまりに弱きを哀しむ
 おそれかしこみ
 つつしみつつしみをろがみ白す
 おお わが神々よ 祖先の靈魂よ
 ねがはくばわれに
 雄渾の意志をさづけ下し給はんことを

山草賦

白雲の湧き立ちおこる
 おくたまの
 雲取山にわがよぢて
 指を傷け血を流しわがとれる
 岩きほしゆ せきこく 冬あふひの類
 新月の夜を遠くもあるき
 幾山こえ荒野こえ背負ひきたれる

この愛しき山の草ら
いま 秋かぜの中なる
わが月かげの庭にうつしうゑむとす
またおもふかの山なみかの峯々
かの雲らかの溪かの風
樹かげには小げら木たたき木をめぐり
日だまりにあけびは熟れてはぢけたり
えなが山がら遊び呆けたる
この秋もはやひとときならむ
わが山ぐさの根たちよ

さらばはげしき冬を
すこやかにこせ
來む夏の汝が花のあくまで清く
なが香ひいみじくも高きを
われひねもす戀ひつつ待たむぞ
夢に見るをとめのごとく
はぢらひためらひ花咲く時を

神國

日本は神國だ

われわれは皆な神々の子孫だ

かかる民族は世界のどこにもない

眞に選ばれた人種だ

かかる民族が

新しい高千穂の峯

世界の屋根中央アジアに

天降る秋がくるだらう

そこでは日月がいつしよにのぼり

世界中が一目で見わたせ

さまざまな人類の陰謀や敵意がわかり

人民の悲しみや悦びがわかる

寒帯と熱帯の岐るるところ

アジアとヨーロッパの境界地方

黄河楊子江インダスオビエニセイの水源

ああ、新しい神々よ新しい女神たちよ

いざやゆきませ

天南星の歌

天の南に星あり

陰々として怪光を發す

太古罪ありて

熱帶の地上に顛落す

その破片あやまりて皇土に散る

すなはち天南星となれり

然れども

皇天の清純なる陽光を好まず

自らおそれ卑下して陰濕に住す

その陰界にはびこること

悪鬼のごとく

暗紫色の佛燄苞はかなしくも

陽にそむきて開き

根莖に猛毒をたくはへ

人畜にわざはひするもの

汝 天南星よ

天界を追放されたるものよ

地獄の花よ

邪悪なる蝮蛇の友よ

汝すみやかに

わが皇天皇地を去つて

原始にかへり

かの美しき天上の星となれ

深山風蘭の歌

五月

山に入りて意中の人を求む

意中の人つひにあらず

かの樹上の風蘭に會ふ

深山の幽谷に生じ

朝雲の湧き立つところ

夕ぎりのうづまくところ

蒼々たる老木の幹に坐りて
つねに爽味の山氣を呼吸し
つねに清新の溪風に浴す
なんぢ深山風蘭よ
その白鷺の舞へるがごとき花よ
その多肉の鮮緑の勇ましき葉よ
その神仙の香氣よ
紫の溪谷の極るところにありて
何ぞひとりふくいくたる
何ぞひとり悠々たる

わがみやまふうらん
ああ わが求めし人
山谷に棲みて久しく
つひにかの高邁の草と化れり

みやませきこくの歌

風きよく

谿水のるりいろに光るところ

うつさうたる巨樹の枝に坐りて

ひとり匂ふものは何ぞ

みやませきこく

その氣根はながくのび

深山の正氣を啖ひ幽谷の雲を吸ふ

その莖透明にして

その華あくまで白く

その香ひなんぞ高貴なる

寥々として山いよいよ深く

沈々として水つねに湧く

よあけの爽味なる

月の出の幽幻なる

山樹ことごとく若葉し

風物みな青し

ああ 六月

身は老樹の幹高く棲みて老を知らず

ひとりふくいくと匂ふもの

みやませきこく

山中の人

君を尊び

君を敬し

以つて呼びて

長生蘭といふ

無題

三月の夕べ

蘭の花匂ふ部屋でただひとり

満腹の冥想に耽つてゐた

わたしはふと戦つてゐる幾萬の人を想ひ

そこの荒涼たる風物を考へた

するとわたしはいきなり

目に見えない大きな力になぐられた

すみません すみません

申しわけありません

とわたしはどやされながら叫んだ

ああ わたしは嘗つて

こんな恥しい思ひをしたことはない

身體も心も眞紅に恥で染まり

ごみのやうに小さく無價値な自分を見た

やがて邊境につらなる怖しい岩山が浮かび

そこから放射する冷酷なものに打たれ

そこに化石された宇宙の意志を讀んだ

生物は人類は民族は

常に戦はねばならぬ

氷河に埋没したマンモスらを見よ

寒氣に敗走した虎や獅子の類を見よ

幾億の生靈は已に死滅し

幾億の生靈は新に生れた

常に敵に向つて戦ひつつ生きることは

生物の本然の姿である

古成層の化石は天を指して語つた

敗者はかくのごとく無慚なりと

子や孫や永劫につらなるものに
血の美しい世界を残すために
われらは常に常に戦はねばならぬ

土蜘蛛を撃つ

黙々として戦ふもの
それ神兵
断乎として切るもの
これ神劔
見よ
聖勅炳として額にかがやく
われら今や

國を擧げて土蜘蛛を撃つ

官軍勅を奉じて

世界の土蜘蛛を撃つ

神命に従はざる賊を撃つなり

空前絶後の大偽者を撃つなり

一億みな倒れて後止まんのみ

君よ 大言壯語と言ふ勿れ

日本の興亡この一戦にかかる

われらの血は燃ゆ

われら一億の臣民は今やみんな目醒めてをり

われらの前衛は

ハルハ河畔で神のやうに戦つてゐる

野馬は悲しげに嘶き

砂鷄たちは苦蓬のかげにかくれた

見たまへ もうもうと

砂塵を卷いてせまりくる胡人の軍隊を

雲表にかくれ襲ひきたる敵機を
一望千里大波のごとく横たはる砂丘
ああこの食物のない不毛の地方で
われら同胞の血はつねに流されてゐる
モンゴル民族をまもるもの
神聖なる東洋を守るものは誰だ
胡人どもよ よく聞いておけ
千年の後までもなほ
われら及びその子孫たちの血は
火のごとく燃えてゐるぞ

これぞ三千年を傳へきた尊い神々の血であるぞ

神いでましぬ

熱帯樹しげる南島に

わが天花舞ひ下るとき

零下四十度の北邊にありて

防人は吹雪に埋まる

このころ

寒熱を超え季節を飛躍し

ただひたすらに天道に連なる

昭々たるかな この道や

古往今來二つあるべからず

光る豊旗雲の彼方

はるか九天におはします

天皇に歸一し奉るのみ

天下百億の國民ら

これを仰ぎ

これを敬ひ

これに従ひ

これを祭り奉る

みたみわれら

一億の大和民族

いまや

勅を拜し

錦旗を奉じ

先驅して世界の悪虐をうつ

ああ

人類をその處にあらしめんと

宣はせられ神出でまし給へるなり

崑崙ヒマラヤの嶮も

天風を阻むあたはず

七つの大海原も

天徳をさへぎることあたはず

八紘の民らみな

天を祭り首を伸ばし

胸とどろかし

期して待つあり

ああ 有難やうつつ世にして

神いでましぬ

峠の畠

巨大な冬の落日が

峠にあるとき

三人の農人が

斜面にある麥畠を踏んでゐた

五寸程伸びた麥が眞紅に染まり

やがてそれも消えた

太陽が赤松山の向うに落ちたのだ

老農夫婦と若い嫁は

まだ長い畝を行つたり來たりして

一心に麥踏みをやつてゐる

風がひゆうひゆうと松の梢に唸りはじめ

妻いやうに深い天に星がきらめきだした

鴉どもが畠をすれすれに飛んでいつた

だが人々は未だ歸らない

凍る山の畠で幽かな星光りの中に

黒々と浮かび上つた尊い影繪であつた

ただ登るのさへ息の切れるあの山路に

肥料を運ぶのは大變だなあと思つた

ひとり山を下りながら

まだ小さく夜空で動いてゐる三つの影を

わたしは何遍かふり仰いだ

この凜烈な寒氣をついて

日本の麥が力強く伸び立ちますやうに

わたしは祖先の神々に祈つた

ああ 山の畑は新鮮で香ばしい匂ひがする

神の宇創り奉らむ

來らば來れ

碧眼傲慢の不正の徒よ

雲のごとく津波のごとく

悪魔のごとく

襲ひ來り見よ

われに破邪顯正の劍あり

われに神に捧ぐる血あり

神意によりて天指したてる

大和國原

日月を東西に懸け

星辰を首に廻らし

悠然として大海原にのぞみ

堂々八紘に光あまねきもの

大神のくに

大日本國よ

みたみわれ

親の子われは子の親ぞ

されば残る一人となるとも

血と血をつなぎなし

肉と肉をつなぎなし

胸うちたたき劍はき

つづきつづきて幾世ふるとも

まつろはぬものみな

うちつくすべし

ああ みことかしこみ

ヒマラヤをわが屋根となし

太平洋をわが庭となす

新しき神の宇創り成さむ
創り奉らむ

ああ特別攻撃隊

真珠灣頭に月出でんとす
わが特別攻撃隊九勇士ら
灣内深く潜りて
今將に夜襲に移らんとす
生死を越え自我を忘却せる
その心境淡々として神のごとく
もとより生還を期せず

功名を期せず

ひたすら盡忠の誠をいたさんとす

明月はすでに出てたり

見よ 潜望鏡に映るものは何ぞ

わが友軍の爆砕をまぬがれたる

敵主力戦艦なりアリゾナの如し

則ち必中の魚雷を放つ

忽ち起る萬雷の轟音とともに

火焰天に中し

灼熱せる鐵片月光に飛散し

壯絶極りなし

七色の海波山の如く狂ひ

瞬時にして敵戦艦は轟沈せり

時にハワイ時間午後九時一分

同十時四十一分に至り

攻撃成功の無電報告を終るや

未だ年若き九人の日本男子

ここに聖恩の萬分に報い奉り

従容として自爆す

ああ 忠臣九勇士の靈

忽ち化して明月となり
中天に懸り未來永劫青史を照さん

日本の若鷺

四方八方から群がり集る
探照燈の十字火の中に
ああ 高く じつに高く
浮き出た銀の鷺
日本の飛行機
それはすさまじい
高角砲の彈幕を縫つて

悠々と舞つてゐる
やがてぐつと機首を下げ
垂直降下だ
地上にぶつつかつたかと
思ふとたん
もう又天上に舞ひ上つてゐる
見よ
地上には物凄い黒煙が
雲のやうに湧き上つた
天子様に双向かふものは

このやうに
次々に撃ち滅ぼされていく
ああ 悪鬼の唸くやうな
敵弾の中を 敵地の上を
まだ悠々と飛んでゐる
銀の鷲 日本の飛行機
機上の人
少年航空兵
櫻の花のやうに笑つてゐる

職場の戦争

われら一人一人の力の集りが
一つの目的と精神によつて
一致團結し高まつてゆくところに
日本の眞の強さが生れてくるのだ
只一つの目的とは何であるか
われらの日々の生活のすべてを
上御一人に捧げ奉ること

それは國家の目的に向かつて
まつしぐらに働くことであり
夢中に働くことによつて
われらの職場は常に明るく
感謝とともに益、力が湧き上つてくる
そこには一つの不平もなく
一つの不満もいはず
わたしはあなたをたすけ
あなたはわたしをばげまし
一人の力は二つとなり

二人の力は四つとなり

日本全士の若者の力がここに集り

ああ じつにはかり知れぬ大きなものとなり

そこで國の力も十倍百倍となつて

東西南北ではげしく正義の敵と戦つてゐる

兵隊さんの力も百倍になるのだ

われらもまたその職場職場で

米英の青少年と烈しく戦つてゐるのだ

そこでもわれらは必ず勝抜かねばならぬ

共に生きる

どんな立派な機械だつて

どんな山奥の美しい畑だつて

不正な目的のために使はれるのを嫌ふのだ

畑も機械も使ふ人の心によつて

正しく楽しく生きることを知つてゐる

使ふ人の心が汚れてゐるとき

機械は埃をかぶつて佛頂面をしてゐる

畑も踏まれるのを嫌がつて雑草など生やし

決して美しい顔はしない

機械や畑は無生物だから

人と一緒に働くことを願つてゐるのだ

それなのに大きな愛情のない人や

不正な心の人と共に働くことを拒むのだ

それは何故だ

日本の機械 日本のはただからだ

日本の天地は清く 明かるく 潔よい心で

満ちあふれてゐる

神様の國だ

機械や畑も牛や馬もちゃんとそれを知つてゐる

日本の青少年が全く清く美しい心で

日夜涙の出るほどよく働きよくいたはつてくれるから

機械や畑たちもお互に助け合つて

君たちと一緒に楽しく働きたがつてゐるのだ

お國のために役立ちたがつてゐるのだ

國幸を守る

わが豊葦原の瑞穂の國は
忠義の國 孝行の國 稻の國
疊なす黄金の稻穂
清く明かるく み光に波立ち
その匂天地にみなぎりあふる
中つ國はいま
神のみめぐみに感きはまり

營々として國の幸をぞ刈りまつる
利鎌の光 秋陽に美しく
豊國の豊臣の子ら
いまぞ玉なす汗も心地よく
刈りまゐらする
日の本の幸ぞ この稻穂は
ああ この幸
大君の邊にこそ捧げまつらむ
大いなるみ軍のさなか
かしこけれども

上 み心をこの稻田の上に
たれ給ふと もれうけたまはる
かしこき かしこきはみなり
わが父上わが兄上らは
いま神軍となり遠く出征つ
その留守の國田をあづかるわれら
われらよろこび勇みて
學びの暇々に
大君の田をぞ守るなり
ああこのよろこび何にたとへん

國の穂

三千年の試煉を乗り越え
三千年の大禊を終えて
われら大和民族は
今や全く清められた
決戦の山頂に立ち
太陽に眞向つた
神勅額にかがやき

神靈國原を蔽ふ

見よ

わが三軍が八紘に描ける

堂々の陣形を

神出鬼没 しかも恆に

敵の正面を衝く

一發必殺の魚雷

放てども放てども

盡くることを知らず

一死報國の淵源

滾々として

神代より流れ来る

臣民一億

心に深く魚雷を抛き

決意はすでに

閑寂の底に固り

今や脊梁山脈となつて現る

疾風を遮ぎり

冬陽に光り

八重棚雲を従へ

ああ 隆々たるかな
いかめしきかな
この國の穂

聖恩を歌ひ奉る

山々の雪はとけ
谷々の水はぬるみて
野鳥ら戦ひの南より
春の故郷に歸り來る
しづかなる青山のしげみに
たのしく歌ひ
楽しく巢をつくり

小さな卵らは
すやすやと眠りをるなり
やがて安けき命を
日の國にうけんとす
名もなき草花の 木かげに
匂たかく咲きて
天地のきはまるころ
天日の光あまねく
いや榮えまつるみいつの下
きよらかに樂しげに

草ら萌え出で木々は芽をふき
小鳥ら美しき卵を産めり
ああ聖恩のいともかしこき
名もしらぬ草木鳥獸に及ぶ
ありがたきかなこの日の國は

大和をとめ

きみよ 見たりや

熱帯の海を

きみよ しれりや

ヒマラヤの谿を

そはただに海と山ならず

海々に人々はすみ

谿々に人々はいとなみ

人々は生れ

人々は死す

しかもかれら諸民族は

みなみづからの國を持たず

みづからの文化をもたず

みづからの誇をすてされり

ああ 哀れなるかな

東洋の諸民族

さればをとめらよきけ

大君のみことかしくみ

勇しきつはものら
今や遠く東洋の四邊に征く
そは 何の故ぞ
わが日の本のをとめらよ
天照大神の美しき民らよ
つぎの世の尊きつはもの母たちよ
われらが潔き祖先の血脈に目醒めよ

勅かしこみ征かむ

豊葦原の中つ國に生れ
大八洲底つ岩根に育つ
われら日の本の子
われらやまとますらを
かしこくも大詔を拜し奉る
米英撃滅の大詔を拜し奉る
まこと生ける驗ありとは

このことにこそあらめ
三千年の遠きにあたり
すめらみ神の大みいつの下
われらが、大和民族は
未だ嘗つて敗北を知らざるなり
げに 有難き 靖國の
豊國の男の子ぞ われら
千萬の大いなる軍なりとも
百年のながき戦なりとも
われまづ先にゆかむ

言舉せずしてゆかむ
草むす屍 水漬く屍
ただひとすぢに
大君の邊にこそ死なむ
青雲の向伏すところ
白雲の湧立つきはみ
勅かしこみ とことはに
ああ ふるひたち いさみたち
さきもりなさむ
國守なさむ

神州を護るもの

奥山に正しき青年あり荒磯に清き少女あり

ああ 現代の青春は美しきかな

若葉のごとく 花のごとく

天空に映りて 碧海に匂ひて

日本は明きかな

工場に逞しき戦士あり又働く處女あり

ああ 現世の青春は逞しきかな

鐵のごとく 焰のごとく

大地に鳴りとよみ 都會に光りて

日本は勇しきかな

われらに鐵壁の信念あり絶體勤皇の心あり

このころ内に凝つては

青年士女の肉體に發し

自ら皇國の尊嚴を護るもの

外にありてはかの雲に映り山山にあふれ

神州の天地自ら正大の氣に滿つ

ああ 日本は輝しきかな

少年正氣の歌

日の本の大やまとなる
丈夫が子ぞわれらみな
岩走る眞水のごとく
勇ましくすがすがしくも
生ひ立ちゆかん

その心いよいよ清く

その力いよいよ強く
師の君のみちびくままに
國のため捧げむ時を
指をりまたん

大八洲中つしまなる
神ぐにの子ぞわれらみな
かなしみも苦しきもまた
何かあらん險しき山路
踏みつつ行かん

青雲のたなびくあたり
白雲の湧き立つところ
富士が嶺は天にひかりて
いやさかの國のすがたを
海にぞうつす

瑞穂なる豊葦原の
日のくにの子ぞわれらみな
ちちははの訓かしこみ

ひとすぢにわが大君の
へにこそゆかめ
へにこそゆかめ

靈峰高千穂

『ここぞ よきところ
朝日のたださすくに
夕日のひでるくに。』
と仰せあそばされて

皇孫瓊杵尊さまの
天くだりなされた山

日向のくに高千穂の峰
くちふる嶽

あふぎ見る天の御座所から
たなびく雲をおしわけて
家來を大勢従へられ
堂々とおくだりあそばした

ああ その御幸の行列の
大空をてらし山々をてらし

どんなにか尊くも美しく
神々しかつたことでせう

大和少女

日の本のやは肌の潔き少女よ
この大み軍の神の世に
その心いよいよやさしく
いよいよ強くして
わが勇ましき兵士にも
ゆめ劣ることなけむ
國の力のその半ばは

少女らの心の奥に秘さる
されば氣高きみ代の大和少女よ
次の世の母たる心 母たる力
いやみがきたまへよ
ひたすらに大君に仕へ奉らむ
その美はしの大和心を

詩集 天日の子ら 畢

藏原伸二郎著作目録

- 小説集『猫のゐる風景』春陽堂、昭和二年十一月。
詩集『東洋の満月』生活社、昭和十四年三月。
小説集『目日師』ぐるりあ・そさえて、昭和十四年十月。
隨筆集『風物記』ぐるりあ・そさえて、昭和十五年九月。
詩集『戦闘機』鮎書房、昭和十八年九月。

出版會承認番
い 290386



昭和十九年三月五日 日初版印刷 二千部
昭和十九年三月十日 日初版發行
天日の子ら 定價金壹圓五拾錢
特別行爲稅相當額 五錢
合計 壹圓五拾五錢

著者 藏原伸二郎
發行者 湯川松次郎
印刷所 井下書籍印刷所
配給元 日本出版配給株式會社
發行所 株式會社 湯川弘文社

大阪府南區扇町通一ノ五三
振替口座大阪 七二九七番
會員番號・一三七五〇一號

東京都神田區渡路町二ノ九
(西大三五)

新詩叢書



詩人のこのたびの犬戦にいちはやく
 感應してその筆を鋭くせる、他の文
 藝分野にその比をみず。又その期讀
 の氣運大いに世に起りて詩集の翹望
 せらるる今に優る時なし。ここに本
 邦中堅詩人の詩集を蒐めて新詩叢書
 とす。
 B 6 刊 價 上 裝 本 ・ 類 價 各 冊 壹 圓 五 拾 錢

湯川弘文社

大阪府南区東成町一丁目一五番
 電話 七九二一

竹村俊郎 鹿草
 岩佐東一郎 二十四時
 城 左門 秋風秘抄
 笹澤美明 海市帖
 小野十三郎 風景詩抄
 岡崎清一郎 夏館

安藤一郎 静かなる炎
 村野四郎 珊瑚の鞭
 阪本越郎 益良夫
 津村信夫 或る遍歴から
 竹中 郁 龍骨
 安西冬衛 大學の留守
 中山省三郎 豹紋蝶
 近藤 東 紙ノ薔薇
 田中冬二 菽麥集
 藏原伸二郎 天日の子ら
 福原 清 催眠歌

965

2

終

